主　論　文　要　旨

報告番号	甲　乙　第　　号	氏　名	土　田　知　則

主論文題名：
ポール・ド・マンの戦争

（内容の要旨）

アメリカ・イェール学派（脱構築派）の領袖ポール・ド・マン（1919-83 年）は、死から四年後の 1987 年 8 月、突如惹起された欠席裁判とも称すべき大論争、いわゆる「ポール・ド・マン事件」の標的に晒され、激しい非難を浴びることになった。当時ベルギーでド・マンに関する論文執筆を準備していたオルトウィン・ド・グラーフが偶然発見した『ル・ソワール』紙掲載の記事「現代文学におけるユダヤ人」（1941 年 3 月 4 日付）の内容が親ナチ的・反ユダヤ的と断じられ、この文学理論家の過去および現在に関し、根本的な見直しを計ろうとする気運が高まったのだ。本論文は、この「ド・マン事件」について再考することで、そこに表出する「読むことの不在」、「理論への抵抗」という現象と、それに付随する重要な問題を徹底的に暴き出すことを主な目的としている。さらには、ド・マンが故国ベルギーからアメリカへと活動の舞台を移す過程で生じた決定的な方法論上の転回――いわゆる「言語論的・脱構築的転回」――についても考察を巡らせている。「ド・マン事件」の原告側にあったのは、親ナチ的・反ユダヤ的という問題以上に、ド･マンがアメリカにもたらし、新たな批評方法として伝統的なアカデミズムを揺るがすことになった「ディコンストラクション（脱構築）批評」に対する計り知れない嫌悪感と危機感だったからである。また、ド・マンの新奇な批評用語の数々、なかでも論者たちに最も強い抵抗力を生じさせたと想像される「（文字）の物質性」についても、詳細に論じることにした。この難解な用語には、ド･マンの批評行為全般を縮約的に示すと思われる「アレゴリー」的機制のあり方が、最も特徴的かつ具体的に立ち現れていると考えられたからである。

第一章「〈卑俗な〉という危うげな一語に託して――ポール・ド・マンの選択」では、「ポール・ド・マン事件」の発端となった『ル・ソワール』紙の特集「ユダヤ人とわれわれ」に投稿された、ド･マンの「現代文学におけるユダヤ人」を含めた全四篇の記事を精読することで、当時の社会状況とド･マンが自らの記事に込めたと想像される巧妙かつ微妙なレトリックについて考察した。ド・マン以外の三人――レオン・ヴァン・ユッフェル、ジョルジュ・マルリエ、V・d・A と署名された著者――の記事は、概して濃厚な反ユダヤの論調に満ち溢れている。例えば、ユッフェルは「われわれは断固として彼

ら（ユダヤ人）との混血を禁じ、思想、文学、諸芸術といった分野における彼らの有害な影響から精神的に脱する構えである」、そしてユダヤ人の絵画について論じるマルリエは、「それら（様々な前衛芸術）に、やがては完全この上ない無秩序に立ち至るような、極めて転覆的で破壊的な性質を付与してしまったのは、まさにユダヤ人たちなのである」と言い放っている。

ド･マンの記事は華やかな絵や写真を付された他の記事の右下隅に、目立たぬようひっそりと掲載されている。そこには、養うべき家族を抱えた弱冠 21 歳の若者が、ナチ統制下のブリュッセルでぎりぎり書き付けることができたと思われる、綱渡り的なエクリチュールを確認することができる。主な要点を二つほど指摘しておくなら、まずこの記事でド･マンが高く評価する作家にドイツ人は一人も含まれていない。それどころか、そこにはスタンダール、ジッド、ヘミングウェイ、ロレンスらと並び、フランツ・カフカの名が挙げられているのだ。これは決して何気なく付加された名前ではない。何故なら、「現代文学におけるユダヤ人」執筆から約二ヶ月後に、同じ『ル・ソワール』紙に掲載された記事「シャルル・ベギー」において、ド･マンはこの熱烈なドレフュス派の詩人に対して、心からの賛辞を表明しているからである。

より本質的なレトリックに関する策略は、冒頭の一文「卑俗な反ユダヤ主義は、ユダヤ化されているという理由から、戦後（1914 年から 18 年にわたる戦争後）の文化現象を堕落頽廃したものとみなすことに欣々としている」に潜んでいる。後の脱構築的な分析を先取り的に提起するかのように見えるこの一節は、文章の明快で一義的な解釈の可能性を宙吊りにしている。ここにいきなり配された「卑俗な」という形容詞は、いったいいかなる意味作用を担っているのか。この一文は反ユダヤ主義を称揚しているのか、あるいはそれに異を唱えているのか。「卑俗な」という一語がなければ、この一文は明らかに反ユダヤ主義を批判するものになってしまい、ド･マンの生命を危険に晒すことになったであろう。この一語が存在するために、当一文はかろうじて反ユダヤ主義を否定しない性質のものと成りおおせているのだ。つまり、「卑俗な」という語は、ある特定の反ユダヤ主義のみを形容するものであり、他に純正な反ユダヤ主義、すなわち、道義上いささかも問題のない、尊重すべき反ユダヤ主義が存在するという解釈をどうにか成立させることを可能にしているのである。そしてもう一つ可能な解釈は、反ユダヤ主義は総じて卑俗的であり、例外はあり得ないというものである。カフカやペギーへの言及に注目するなら、後者の可能性が濃厚だが、その点を見なければ、どちらがより妥当な解釈であるかを見定める根拠はない。ド･マンの身が安全だったことを考慮するなら、当事者たちがこの巧妙極まりないド･マンのレトリックに気づかなかったことは明らかである。ド･マンは確かに反ユダヤ主義を標榜する『ル・ソワール』紙の特集コラムに一稿を投じた。それは紛れもない事実である。しかし、それでもなお、この記事の有する

非協調的なスタイルは、ド･マンが親ナチ的であったとする機械的な解釈に亀裂を生じさせ、言説の内部に潜むアポリアを暴き出すものとなっている。反ユダヤ主義というキー・タームにさりげなく添えられた「卑俗な」という一語。それは依然として、ド･マンを反ユダヤ主義者と断罪する卑俗な「読み」に対する危うい防御柵のようなものとして機能し続けているのである。

第二章「ポール・ド・マンと二人のコラボラトゥール」では、「現代文学におけるユダヤ人」とほぼ同時期に執筆された二人の対独協力作家（コラボラトゥール）に関する記事について論じている。ド･マンはこれら二人以外の親独的な作家（ジャック・シャルドンヌ、アンリ・ド・モンテルラン）についても文章を寄せているが、ここでは最も対独協力的とみなされたロベール・ブラジヤック（1909-45 年）に関する記事「ロベール・ブラジヤック『われらの戦前』」（1941 年 8 月 12 日付）と、ピエール・ドリュ・ラロシェル（1893-1945 年）に関する記事「ドリュ・ラ・ロシェル『今世紀を理解するための覚書』」（1941 年 12 月 9 日付）を取り上げている。その狙いは無論、「コラボラトゥール」と称され、後に厳しく糾弾されることになったこれら二人の作家を、ド･マンがどのように読んでいたのかを確認することにある。ブラジヤックについての記事にはナチスに言及している部分が二箇所ある。しかし、そこで述べられているのは「ドイツ国家社会主義の勝利」という事実と、それに直面した若きブラジヤックの戸惑いでしかない。ド･マンが『われらの戦前』を取り上げ、それを評価したことは事実だが、そこには後に対独協力者に変じるブラジヤックの思想に加担し、それを積極的に擁護するといった意図は微塵も感じられない。ド・マンにとって、ナチス台頭などの政治的な事件は、文学者たちを彼ら本来の使命から遠ざけ、文学共和国の旧き良き伝統を疲弊させるマイナス要因としか思えないからだ。それは、この記事の最後から二番目の一文に明確に表現されている。「私の想像によるなら、『われらの戦前』は依然として、教養あるフランス人に対し、失われた楽園を呼び覚ましているのである」。

ブラジヤックに対するのとは対照的に、ド･マンはドリュに対しては概して辛辣な評価を示している。ドリュは自身の主張する「反-合理主義的テーゼ」を、当時の政治的な風潮、とりわけ「ファシスト的なイデオロギー」の内に確認される「スポーツ的な力」に見出している。ドリュはこの他にも、「中世」に特権的な位置を割り当てたり、合理的哲学の過ちを批判したりしているが、ド･マンはそのいずれの態度に対しても否を突きつけている。ドリュの作品には「否定しがたい活力の徴」が刻まれているというド・マンの批判的言説に秘められているものを理解するには、当時この「活力」という言葉がユダヤ的なもののアンチ・テーゼとして機能していたことを考えるだけで十分であろう。

ド･マンがこれらの記事を執筆した 1941 年の時点において、二人がやがて「コラボラ

トゥール」という範疇に括られ、四年後には揃って壮絶な死を迎えるという結末を予想するのは、たぶん不可能であったろう。運命の悪戯と言うべきか、ベルギーの若きジャーナリストと後の二人の「コラボ作家」は、たまたま同時代に居合わせたという、おそらくただそれだけの理由で出会うことになってしまったのである。

第三章「歴史から言語へ――ポール・ド・マンの言語論的転回」は、ド・マンがベルギーからアメリカに居を移し、やがて「イェール学派」の領袖としての地位を確立する過程で生じたと考えられる思想的な大変革――「転回」――について考察している。アメリカに渡った後のド・マンは徹底して反-歴史的な立場を表明し続けたが、ドイツ占領下の彼の著作には、後期のそうした姿勢を予測させるような要素はほとんど見受けられない。後期の著作では負の価値を背負うことになる用語や理念がこの時期には頻出し、枢要なキー・タームの役割を演じている。具体的に言うなら、ベルギー時代に書かれたものには、その後例外なく批判の対象として位置づけられることになる「統一性」、「一貫性」、「均質性」、「総合」、「完全調和」、「オリジナリティ」、「美の源泉」、「客観的現実」、「調和のとれた物語」、「よりよき統制」などといった用語や表現が、歴史との関係において、高々と掲げられ称揚されている。特に注目されるのは、1942 年 6 月 7-8 日に掲載された「批評と文学史」という記事に見られる「内的一貫性を有する創造的な現象」という表現である。こうした言い方が後期の脱構築的な視点と根本的に対立するのは明らかである。ド･マンの思想的転回がいつごろ、どのようにして彼の身に出来したかは定かでない。だが、ベルギー時代と後期の間に「隔絶」、「断絶」を生じさせたものが、「歴史」から「言語」へ、あるいは「歴史」から「修辞」へという意識転換であったことは想像に難くない。それはいわばド・マンの「言語論的転回」として生じたのだ。後にド･マンを批判する者たちが不快感を示した「物質性」、「出来事」、「アレゴリー」、「機械」といった難解な用語や概念の数々は、すべてこの「言語論的転回」によってもたらされた。実は、「ド･マン事件」の勃発にはこうした転回も大きく関わっていたのである。

第四章「ポール・ド・マンと〈物質性〉に関する二つの解釈系列」では、ド･マンの脱構築批評にとって最重要と思われる「物質性」という概念の解釈について検討した。「物質性」、あるいは「文字の物質性」は、ド･マンの用語・概念のなかでもとりわけ晦渋である。その規定をめぐっては、これまで明確に異なる二系列の説明がなされてきた。一つは、この用語を物理的・即物的なニュアンスから切り離し、あくまで理念的なものとして思考しようとするもの。そしてもう一つは、それを具象的なものとして――つまり、文字どおり「物質=もの」として――思考しようとするものである。批評家・研究者のすべてが、いずれか一方の解釈に与しているわけではない。確かに、一方の立場だけを厳然と主張する者もいるが、これら二つの解釈が同一の批評家・研究者のなかで、混然と

同居していることも決して珍しくはないのだ。

二系列の解釈は明らかに乖離している。とはいえ、必ずしも矛盾してはいない。そこには、ド･マンの主要なキー・ワードである「アレゴリー」の機制と相通じるものが潜んでいる。抽象的な理念としての「物質性」を主張する者としては、それを美学および美学イデオロギーの完成を阻む予測しがたい「力」と規定するレイ・テラダ、文字の具象的な「もの性」を決して認めないマーク・レッドフィールド、そして視覚や聴覚によって具象的に把握・感知されるような「もの性」の外部に「物質性」の概念を位置づけるジャック・デリダらがいる。そして一方に、「物質性」にそなわる具象的なものとしての側面を目に見える「文字」のうちに見て取るマーティン・マックィラン、「物質性」を耳に聞こえる無意味な「音」のなかに探り当てるJ・ヒリス・ミラーなどがいる。

この文字の「物質性」という問題を考える上で、日本には極めて興味深い作家がいる。「文字禍」、「悟浄出世」、「かめれおん日記」などの作品を、ベルギー時代のド・マンと同じ頃に執筆していた中島敦（1909-42 年）である。この稀有な作家には、奇しくも、「歴史」、「出来事」、「器械=機械」、「自由意志=意図」など、ド･マン的なテーマが頻出するが、ド･マンの感覚と酷似する物質的な文字観は「文字禍」（1942 年）のなかに凝縮された形で立ち現れている。この作品に登場する老博士ナブ・アヘ・エリバにとって、「文字」とは本来「単なるバラバラの線」、「単なる線の集合」、すなわち「物質」に過ぎないのだが、それはやがて特定の音や意味と擬似必然的な関係を取り結ぶことになる。表現こそ異なるものの、こうした関係を出現させる「文字の精霊」は、ド･マンの言う「美学イデオロギー」とまさに同種の趣を呈していると考えられるだろう。何故なら、中島が提起しているのは「文字」の恣意的=暴力的な指示機能およびその縮減不可能性という問題であり、ド･マンの「美学イデオロギー」批判の核心もまさにそこにあったからである。

「物質性」という概念を純粋な抽象的理念と捉えるか、はたまた具象的な「もの性」として考えるかについては、同じ批評家・研究者のなかでも微妙な揺れ動きが認められる。例えば、ヒリス・ミラーは「物質性」という概念の具象性を唱える一方で、レッドフィールドらの主張にも加担している。バーバラ・ジョンソンは「物」と詩学に関わる考察をカントの「物自体」という視点から開始するが、最後は「文字」の具象的形状という問題に比重を移している。デリダの場合はさらに複雑で、『シニェポンジュ』（1984 年）のデリダと「タイプライターのリボン――有限責任会社 II」（2001 年）のデリダは、少なくとも「物質性」の問題に関する限り、明らかに逆向きの関心に引きつけられている。つまり、「物質性」という概念は、具象的な「物質=もの」と抽象的な理念の双方に関係し、両者を結びつけると同時に引き離しているのだ。このことは、「物質性」が「アレゴリー」の機制を示す下位概念の一つとして機能している可能性を指し示して

いる。J・M・G・ル・クレジオが語るとおり、言語とは「あるがままの物質」であると同時に、「言葉につくせぬ〔・・・〕永遠の空虚」でもあるのだ。

第五章「〈ポール・ド・マン事件〉とは何だったのか」では、反ド･マン陣営の大物歴史学者として「ド･マン事件」をミス・リードしたジョン・ウィーナーを例に、この事件の背後にあったものを明らかにしている。資料として取り上げたのは、『応答――ド･マンの戦後ジャーナリズムについて』（1989 年）に掲載された J・ヒリス・ミラーの批判文書「ジョン・ウィーナー教授への公開質問状」である。ミラーは「イェール学派」の “Big Four” の一人としてド･マンの傍らにいた人物であり、この論争においては、「脱構築派」という理由だけで、いわば被告人席に連座させられている。

ミラーは『ル･ソワール』紙などの記事を入念に精査・精読した上で、「ド･マン事件」という一連の騒動に通底する諸問題を、おそらくどの論者の議論よりも的確かつ簡明に摘出することに成功している。ミラーがまず批判するのは、ウィーナーらに見られる「読むこと」の決定的な不在という問題である。ウィーナーは論敵の没年さえ正確に把握していない。ド･マンは 1983 年、64 歳で亡くなったが、ウィーナーはそれを 1984 年、65 歳と伝えている。問題となった記事についても、ウィーナーは 2 篇と述べている。これは言うまでもなく、1 篇の誤りである。ミラーはウィーナーに対し、「あなたは本当にその問題の記事を読んだのですか？」と問いかけているが、答えは明白であろう。読んではいないのだ。ウィーナーはミラーのこの批判に対して、執筆記事の締め切りに追われていたなどと言い訳しているが、どう考えても笑止千万と言う他ない。

ウィーナーの言明の奇異さと杜撰さは、ジュリア・クリステヴァの研究を反ユダヤ主義と決めつける、「現代文学におけるユダヤ人」は言うに及ばず、「コラボラトゥール」やシャルル・ペギーに関する記事に目を通していない、クルト・ヨーゼフ・ヴァルトハイムとド･マンを同一視する、資料をオリジナルのフランス語のまま提示することをダメージ・コントロールと断じる、ハンス・ローベルト・ヤウスがイェール大学で教鞭を取っていたことにかこつけ、ド・マンを彼の共謀者と主張するなど、枚挙に暇がない。

ミラーが次に注目するのは、「脱構築批評」に対する数々の誹謗中傷である。こうした断罪は結果的に、当のミラーをはじめ、ジャック・デリダをもファシストと決めつけることになる。ド･マン糾弾者たちの目的はただ一つ。アメリカ批評界の伝統を揺動・撹乱させる「脱構築」という悪しき外来新種を、ド・マンという外来思想家の擬似スキャンダルを利用して完全に駆逐することでしかない。「脱構築」に対する無理解にも目に余るものがある。ウィーナーは「言語」、「テクスト」、「読むこと」など、この批評が実践していたことを完全に曲解している､あるいは端から理解しようとはしていない。それは、より巨視的に眺めるなら、「文学理論」への抵抗と言い換えてもよいだろう。彼は「新歴史主義」など、「脱構築」に隣接する新手の批評方法をことごとく破壊的な

ものとみなし、それらの徹底的な抹消を唱えているのだ。つまり、ド･マンの糾弾者たちを真に突き動かしていたのは、自分たちがこれまで執拗に守り抜き、その権威・権力を維持してきた旧来型の研究法が、「脱構築」など外来新種の侵入・到来により決定的な破壊を被るのではないかという強迫めいた不安・恐怖に他ならない。「ポール・ド・マンの戦争」、それは四十数年前に書かれ、十分な精査・精読も施されなかった一篇の新聞記事を標的に繰り広げられた愚かな知の戦争だったと言ってもおそらく過言ではないだろう。

本文中に、『ル・ソワール』紙、『ヘット・フラームスヘ・ラント』紙、『カイエ・デュ・リーブル・エグザマン』誌、『ジュディ』紙、『ビブリオグラフィ・ドゥシェンヌ』誌から訳出した 12 篇の記事を、「訳者解題」を付す形で収録した。

Keio University

Thesis Abstract

No. 1

Registration Number:	□ "KOU" □ "OTSU" No. *Office use only	Name:	Tsuchida Tomonori

Title of Thesis:

Paul de Man's War

Summary of Thesis:

In August 1987, Ortwin de Graef accidentally discovered some two hundred newspaper articles which had been written by Paul de Man in World War II for *Le Soir*, a leading Belgian newspaper. Among them was an article written for a special issue on the 'Jewish problem' (March 4, 1941) entitled "Les Juifs dans la Littérature actuelle" ("Jews in Contemporary Literature"). Those who felt a strong hatred for de Man and his critical way of thinking took this occasion to denounce him as a pro-Nazi or an anti-Semite. Consequently, a heated controversy, the so called "Case of Paul de Man," broke out and spread in no time in the U.S. and European countries.

In the article in question, de Man held a high opinion of Franz Kafka, without mentioning any German writers (moreover, about two months later in another article, he referred to Charles Péquy and sang the fervent praises of this passionate Dreyfusard).

De Man's most skillful trick of rhetoric is latent in the epithet "vulgar / vulgaire" in the opening statement. What signification is this epithet charged with? It makes the anti-Judaism it refers to both fair and vulgar. That is, it makes the meaning of this statement hang in the balance. It deconstructs a machine-like interpretation that de Man was a pro-Nazi journalist, and functions as a hazardous shield to vulgar readings.

J. Hillis Miller, de Man's former colleague, was implicated in this scandal, merely because he had been a deconstructive critic. After careful investigation and close reading, Miller revealed "the absence of reading" and "the resistance to theory" on the part of de Man's opponents, including Jon Wiener ("An Open Letter to Professor Jon Wiener"). The insistent aim of de Man's enemy camp was to expel "the deconstruction" ---an evil, foreign idea--- from the traditional academic society of the U.S. by taking full advantage of de Man's 'scandalous' case.

In his latter period, de Man changed his method from "historical" to linguistic" (Paul de Man's linguistic turn) and made use of several abstruse terms such as "materiality," "machine," "event," and "allegory." That would also cause an instinctive dislike of de Man on the opponents' camp.

Far from being a fair controversy, "the Case of Paul de Man" might be nothing but a silly pseudo-intellectual war unfolding around an article that had never been given full investigation or a deconstructive reading.